論文審査の結果の要旨

健やか親子 21 の最終評価の結果、第 2 次の重点課題の一つに「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」が挙げられている。育てにくさは親の主観的経験であり、子育ての意識調査において 7 割以上の母親が子育てをしていて負担・不安に思うことがあると報告されている。本研究は、育児上のネガティブな感情に対する母親の対処力を高めるプログラムを開発し有用性を検討することを目的にした研究である。14 名の研究参加者にフォーカスグループインタビューを用いて母親の育児上のネガティブな感情の実態と対処を明らかにした第 1 研究、それに基づきプログラムを開発し、14 名の研究参加者に質問紙法と個別インタビューを用いて実施前、実施直後、実施 1 ヵ月後の 3 時点で評価を行い、その有用性を明らかにした第 2 研究の 2 段階の研究で構成されている。自立した養育が可能な母親を対象とし、母親の認知面に働きかけ、対処力を向上させるプログラムである点に独自性、新規性がある。また、本研究課題は、現在育児をしている母親への支援として母子保健で必要な研究であり、実践に活用できる貴重な研究である。

Ⅰ．予備審査においては、次の点が議論された。

1.　本研究の特徴が見えにくいことと記述内容の重複等の見直しについて

文献検討はしっかりできており、全体的に根拠を示しながら、論理的に記述されているが、用語の不統一、重複箇所が多く、記述の整理が必要である。

本博士論文は、母親の育児上のネガティブな感情へ対処する力を高めるプログラムを開発し、有効性を検討する第 2 研究がメインであり、第 1 研究はプログラムの題材を検討するための研究である。第 2 研究 part1 のプログラム開発については、第 1 研究の結果を分析している内容のため、第 2 節結果という表現は違和感がある。第 2 研究の part1 というよりは、第 2 研究のプログラム（介入方法）として、第 2 研究の方法の中に位置づけた方がわかりやすい。

第 2 研究 part1 のプログラムの開発が根拠と共に丁寧に書かれているが、介入の要素については、文献検討で記述されているため、再度記述する必要はない。P70 にプログラムの展開の表があるので、その内容に沿って本文の記述をするとわかりやすくなるのではないか。その際、プログラムの内容の記述には番号とサブタイトルを付ける、箇条書きにするなど整理した方が理解しやすい。

研究の参加者と数の中に調査の内容が中途半端に入っていたり、データ収集方法の内容と評価内容が重複していたりしており、記述の整理が必要である。

2.　第 1 研究と第 2 研究との関係性の不明瞭さについて

第 1 研究の結果をどのように第 2 研究に用いたかなど、説明が必要である。

3.　用語の使い方が一貫していないことについて

「対処力」、「対処方法」、「対処」の言葉が出てくるため、それらの使い分けが必要である。特に「対処力」についてはキーワードのため、概念化（操作的定義）が必要である。

4. 概念枠組みの図と本文の記述内容との不一致について

育児の自己効力感のみプログラムとの相互作用があり、「ネガティブな感情が湧きおこる意識」がどことも関係していない。関係性がわかるように記述内容を一致させる必要がある。

5. 第 2 研究におけるプログラムとその評価方法の記述が不十分であることについて

プログラム（介入方法）の到達目標（期待できる効果）を明確にすることでプログラムの評価が可能となるので追記が必要である。また、プログラムの作成に当たって、本研究に精通した研究者からの指導を受けて妥当性や信頼性は得られているかについて記述が必要である。第 2 研究のプログラムを用いての評価と評価に用いるツールとの関連を明確に示してください。また、各評価ツールを用いる目的の記述も必要である。

プログラムによる介入の成果の分析には統計を用いているが、サンプル数が少ないのでその分析方法を用いた理由の記述が必要である。3 歳までの子どもをもつ母親を対象とした理由（サンプルの選択理由）も記述してください。

P115 の育児幸福感等 3 群に分けて検定しているが、母数が 14 のため、育児幸福感では低群が 0 人になっており、分析方法を再考した方がよい。

6. 結果と考察の記述の過不足について

「7. 研究の参加者と数」の中に調査の内容が中途半端に入っていたり、データ収集方法の内容と評価内容が重複していたりしており、記述の整理が必要である。また、プログラム終了後のインタビューの結果が書かれているが、プログラム終了 1 ヵ月後であることが不明瞭である。そうでないと、子どもの困った行動が減ったことや夫や子どもとの関係性がよくなったことはわからない。

「1. 研究参加者の特徴」の内容は不要と考える。

考察の論旨の飛躍が見られる部分や深まりが不十分な部分がある。p140 の 6 行目に“ファシリテーター”の役割が唐突に出てくるが、これについては結果にも考察にも書かれていないため、取り上げるのであれば、結果に記述しておく必要がある。また、本研究の限界と今後の課題について、4 人以上の子どもをもつ母親の内容は結果にも考察にも書かれていない。子どもの数が 1 名の母親が 8 割を占め、その研究参加者に効果が期待できるのなら、それが見えるように結果、考察に記載すべきである。

7. 本研究の新規性であるプログラムの有用性の検討を中心に考察することについて

第 2 の研究であるプログラムの有用性の検討を中心に記述されるとよい。本研究の新規性についてしっかり考察する必要がある。特に、本プログラムの有効性と改善点については、考察を深める必要がある。尺度が適当なのか、測定尺度がないので、その開発の必要性にも言及するとよい。

また、本研究のプログラムに関して、今後の活用や課題について触れて頂くとよい。

8. 論文構成の見直しについて

考察と総合考察の関係がわからず、重複しているように見える。また、「２）プログラムについて」より「３）母親がとらえるネガティブな感情への対処力の向上」の方がプログラムの目標達成度としては重要である。そのため、順番を入れ替えた方がよい。p138の「３.」のタイトルの表現は、「３．自立的な養育が可能な母親の認知に注目したプログラムの特徴について」の方がよいのではないか。

9. その他

結論については、本研究目的から第2研究が主であるため、第2研究を中心に箇条書きにする。また、要旨と本文の研究参加者数の記述に齟齬がある。

上記の指摘事項9点について、論文の修正がされた。

Ⅱ．博士論文審査（公開審査）においては、次の点が議論された。

1. 本プログラムの効果は、短期効果を評価したものである。「プログラムによる介入が短時間であり、育児への取り入れ期間後の評価も1ヵ月後に行うことから、行動変容までの評価は難しいと考える。」と書かれているが、第2研究のプログラムの評価として、1ヵ月後を評価時点に設定した理由について追記する必要がある。また、今後効果の継続を評価するために3ヵ月後の評価を行いたいとのことであったので、今後の課題としてそのことを追記した方がよい。
2. p67のプログラムの優先順位の考え方として、プリシード・プロシードモデルが取り上げられているが、本研究との関係がわかりにくいため、追加説明が必要である。
3. 研究題名が「ネガティブな感情に対処する力を高めるプログラムの開発」であり、「対処する力」がキーワードのため、用語の定義が必要である。定義されていないため、評価指標としている項目との関係がわかりにくい。また、ネガティブな感情の定義を「否定的な感情」で説明しており、定義を再考した方がよい。
4. 統計については、参加者数が少ないので中央値で分析しているが、有意差が出なかったものについては、効果として強く言えない。育児幸福感に有意差があったが、中央値で見ると差がないように見える。中央値という処理がよいか疑問である。また、Wilcoxon符号付き順位検定は、n=6以下では有意差が出ないとされているので、検定方法の適切性について確認する必要がある。さらに、STAIの低群の不安が低下したことについての考察がない。仮説と異なった結果については考察する必要がある。
5. 結果の行動変容度のa)b)にはコード化カテゴリ化したと書かれているが、カテゴリのみ記述されており、コード、サブカテゴリが見えないため、カテゴリ化の表の提示が必要である。
6. 結果の記述に考察が含まれている。また、結果に記述されていないことを考察しているため、記述の整理が必要である。

7. 本プログラムは、量的評価としては対象者数が少ないため、有意差として現れなかったが、質的な評価を取り入れることにより一定の効果が見られた。介入効果の指標として、育児自己効力感、不安、育児幸福感を取り上げているが、自立的な養育が可能な母親を対象にしているため、もともと育児自己効力感が高く、不安が低く、育児幸福感が高い人が多い集団である。育児幸福感に関しては、プログラム参加前から満点の人が複数いたことから評価の仕方の適切性を含めて考察した方がよい。また、表5のプログラムの展開に「4. 1か月の目標を立てる。」と書かれているが、それぞれの母親の立てた目標を達成できたのかについても評価の指標になる。アンケート内容にそれが含んでいるようなので、そのことを強調しながら考察するとよい。
8. 現在母親たちが本当に困っていることに焦点を当てた支援の内容であり、それを活用できる形でプログラムを作成したよい研究である。母親自身の力を上げるということなので、自己効力感ではなく、レジリエンスという考えについて検討したか。ワンセッションの効果で自己効力感を用いたのが気になった。結果を受けてプログラムをどう改善するかを考えることが重要と考える。
9. プログラムを開発してどのように広めていくのかについて、児童館や幼稚園で育児サークルが月1回開催している元々あるプログラムの年間行事で入れてもらうことを考えているのであれば、それを追記するとよい。
10. 参加者のアンケートから子どもの世話をしながらの受講であったため、集中できなかった母親が2名いた。当初母親は子どもを預けて参加できる計画をしていたが、それがCOVID-19の影響でできなくなったことが研究結果にも影響していると考えられ、環境についても考察した方がよい。

これらの疑問点や修正点をふまえて論文の修正を行った結果、申請論文では上記の指摘に対して概ね適切に修正がなされ、論文の精度が高まった。その結果、看護学の発展に貢献する研究と評価することができ、博士論文の論文評価基準を満たしていると考えられた。

以上のことから本論文は、学位規則第4条第1項に定める博士（看護学）の学位を授与することに値するものであり、また、申請者は、看護学における研究活動を自立して行うことに必要な高度な研究能力と豊かな学識を有すると認め、論文審査ならびに最終試験において合格と判定した。